

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 九州大学

学部・研究科等名 生物資源環境科学府

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目 I 「教育の実施体制」

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名 「基本的組織の編成」

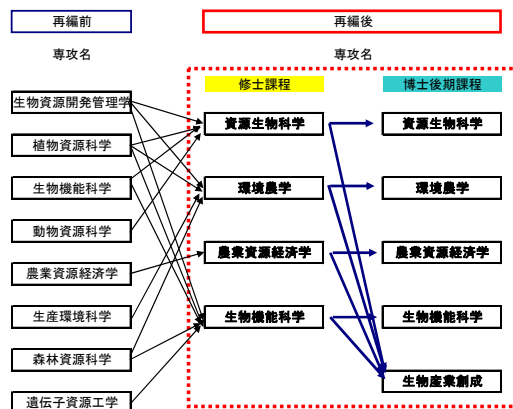
本学府は、平成 10 年 4 月の改組以降、下図の 8 専攻体制で大学院教育を実施してきた。今日、農学部卒業生の 70%が大学院に進学する現状において、農学の属性である学際性を担保しながら、専門性をより一層体系的に深めるためには、細分化された現行の 8 専攻の教育体制では非効率であり、学位の質の保証の観点からも問題は多く、専攻ならびに研究分野に埋没しがちな現在の教育体制を改める必要がでてきた。また、「課題設定解決型人材」を育成するためには、さらなる教育方法の改善が求められていた。さらには、一部の専攻において慢性的な志願者増加と定員超過入が見られ、専攻定員の見直しも迫られていた。

そこで、(1) 修士課程において、専門を一層体系的に学ぶための基礎教育カリキュラムの充実、(2) 課題設定解決を主眼とするアクティブラーニング教育カリキュラムの構築、(3) 専攻の枠を越え、実社会とのつながりを意識した学府共通教育カリキュラム（「農林水産業への貢献」、「生物産業界への貢献」および「アジアへの国際貢献」の 3 副専攻）の構築、(4) 環境科学の広がりとその学際化に即した教育体制の確立、(5) 一部専攻における過度の定員超過の解消を目指した定員の再考、等を目的として学府組織の再編とカリキュラムの改革を実施した。

これにより、(1) 従来の研究対象による専攻分けから、研究手法、方法論を主眼とする専攻分けへの再編による、体系化した専門基礎知識・技術の修得、(2) 修士課程における、研究手法・方法論別の学位審査システムの導入による学位の質の向上、(3) これまで分散していた環境科学教育の集中化による農林水産業における環境資源科学の統合的な修得、(4) 前述の 3 副専攻における人材養成共通教育プログラムの新設による、国際的に活躍するプロフェッショナル人材の輩出、(5) 戦略的研究センターであるバイオアーキテクチャーセンター（平成 22 年 3 月終了予定）に蓄積された知識、技術の本学府教育（博士後期課程・生物産業創成専攻）への展開による生物産業への対応促進、(6) 非アカデミックキャリアパスの拡大を目指した産業直結型の専攻（生物産業創成専攻）の設置による、博士後期課程定員の充足率向上とポストドク問題への対応、(8) 修士課程各専攻の学生定員の再考による定員超過問題の解決、等の効果が期待できる。

この大学院教育改革（改組）は、既に文部科学省および学内において認可されており、平成 22 年度入学学生から適用される。

資料 1 - A 九州大学大学院生物資源環境科学府教育組織再編概要図



現況分析における顕著な変化についての説明書(教育/研究)

法人名 九州大学

学部・研究科等名 生物資源環境科学府

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅲ「教育方法」

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名「授業形態の組合せと学習指導法の工夫」

本学府では、「生物産業界を担うプロフェッショナル育成プログラム」が平成20年度組織的な大学院教育改革推進プログラム（大学院GP）に採択された（～平成22年度）。本プログラムは、産業界において変化する社会情勢に柔軟に対応でき、国際的な場でリーダーシップを発揮するプロフェッショナル人材の育成を目的としている。また、非アカデミックキャリアパスへの積極的な支援も重要なミッションと位置付けている。この取組では、プロフェッショナルマインドの醸成という新たな教育目標と既存の専門教育との協奏的効果を得るべく、本プログラムを副専攻（生物産業創成学コース）として実施しており、これまでにない講義をコア共通科目・キャリアパス支援科目・生物産業創成学科目として開講している（資料Ⅲ－1）。また、学生が自らを振り返って受講記録をつける「教育カルテシステム」の採用、受講者からの申請に基づき院生主導の産学協働研究を支援する制度「産学連携フィージブルリサーチ制度」の設置など、専攻や学年の異なる様々な院生のニーズに応えるため、また教育効果向上のため、独自の履修システムが設けられている。

さらに本学府では、「アジア農学教育の国際プラットフォーム形成」が平成20年度大学教育の国際化加速プログラム（国際共同・連携支援）（総合戦略型）（教育GP）に採択された（～平成22年度）。本取組みでは、日本（九州大学、神戸大学、東京農工大学）、ドイツ（ホーエンハイム大学）、タイ（カセサート大学、チェンマイ大学）の6大学の教員が参加し、それぞれの大学が持つ修士課程の英語コースを対象に「国際共同教育プラットフォーム」を設立し、特にアジア農学に関わる問題について6大学の教員が協働で魅力ある大学院教育を提供することでアジア・EUの大学生を惹きつける国際農業開発教育の拠点形成を目指している。本学府では国際開発研究特別コース修士課程を対象としている。6大学の協働により、遠隔講義、オンデマンド教材の開発・ストーリーミング配信、リレー講義、共同フィールド実習などが実施されており、参加各大学のカリキュラムの充実が進んでいる。

本学府は現在の8専攻を、修士課程4専攻、博士後期課程5専攻に平成22年4月から再編にする。その際、専攻の枠を越え、実社会とのつながりを意識した学府教育を実現するため、主専攻とは別に3つの学府共通教育プログラム（副専攻）を設置する。上記の二つの取組は学府共通教育プログラム、「生物産業キャリアパス設計教育プログラム」、「アジア農学教育プログラム」へとそれぞれ発展した。

以上のように、授業形態の組合せと学習指導法の工夫の観点で大きく改善が進んでおり、関係者の期待を大きく上回ると判断される。

資料Ⅲ－1 生物産業創成学コース科目

科目名	特長
コア共通科目	学際性・国際性の醸成を目指す。少人数セミナー（生物産業創成学特論）を必修とし、該博な知識を得る機会や農学を学ぶ院生としての強みとは何かを考える機会を提供。ネイティブ講師による英語コミュニケーションも必修科目として開講。
キャリアパス支援科目	自分の強みへの気づきを促し、組織で自分を活かす能力の開発を目指す。コンセプチュアルスキル（思考力を磨く）やヒューマンスキル（誰かと何かをやるためのスキル）向上のための講義を必修。キャリアディベロップメント（自らのキャリア設計）とコーピングスキル（ストレスに対処する心の技術）に関する選択科目等も提供。
生物産業創成学科目	クラスワークから実践力への橋渡しを行うことで、真の実践力の醸成や自らの強みのデザインを目指す。コミュニケーションスキル（含ビジネスマナー）を受講後、インターンシップ派遣を支援。インターンシップ後に生物産業システム実習として、受講生に講演会形式で体験談をまとめてもらい、それぞれの受講生の気づきを共有化。